「日々の理科」（第 1345 号） 2018（H30),-3,13

「池モンをさがせ！（２）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

３、一滴の水の中の「池モン」との出会い

教科書にも理科資料集にも、さまざまなプランクトンの写真が載っています。しかし実際に見たことがある子どもは稀で、「本当にこんなのが池の中にいるのか？」と思っている子どもも多いようです。

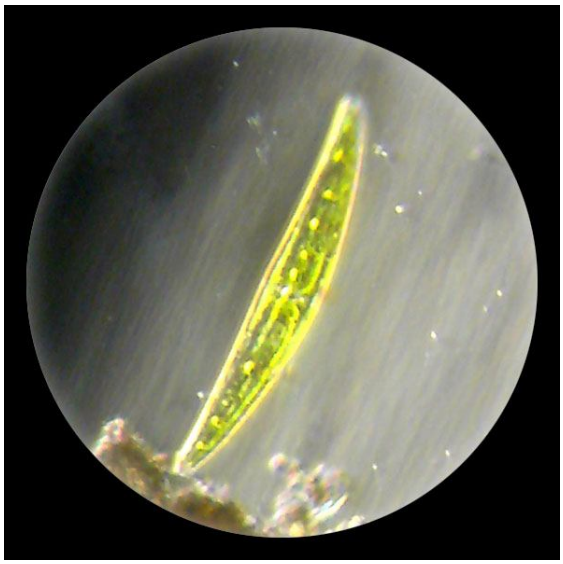
まずは 50ml のビーカーと大型のスポイトを持って、ライオン池に「池モン」の捕獲に行きました。池底の泥を採取する者、澄んだ水をすくう者、水面に浮いた落ち葉を採る者、いろいろでした。実験室に持ち帰り、さっそく顕微鏡で観察します。その興奮と言ったら、どう表現したらいいかわかりません。

まず目に飛び込んでくるのは、イカダモやアオミドロといった、鮮やかな緑色の植物プランクトンでしょう。そのうちどこかの研究所（班）が、動くプランクトンを発見します。ゾウリムシやミドリムシが多いのですが、時々ミジンコやケンミジンコを発見すると、もう大変です。その班の周りは、特別展開催中の博物館のようになってしまいます。教科書や資料集ですでに知っているはずのプランクトン、実物観察の威力を思い知らされます。これがまさに「池モン」との出会いの一瞬なのです。子どものノートからも、その時の実感が伝わってきます。

・「いろんな池モンがいました。おどろきをこして、超おどろきました。」
・「植物プランクトンをはじめて見ました。動物プランクトンもはじめて。」
・「一てきの池の水の中に、何百匹も池モンがいました。ライオン池全体では、何おく匹いるのか計算してみたい。」
・「スライドがらすとカバーがらす（カバーグラス）の間のせまいところで、よく動けると思った。やっぱり池モンは超小さいのだ。」

４、ミカヅキモを探せ！

数あるプランクトンの中でも、子ども達に特に人気があるのが「ミカヅキモ」です。教科書の写真でも緑色で美しく、名称と形状が一致していて親しみがあるのでしょう。ミカヅキモはミカヅキモ属 *Closterium* のプランクトンの総称で、多くの種が存在します。中にはルーペでも見える大きさのものもありますが、どういうわけか本校のライオン池には、微小サイズのものしかいないらしく、なかなか見つけられません。子ども達にとっては「池モンのアイドル」なのです。



従って、見つけたら大変。その子は英雄扱いされてしまいます。興奮気味に、顕微鏡ごとかかえて、私のところに見せに来ます。そんなことをしたら焦点はずれて、とっくに行方不明になっています。子どもにとっては、そのぐらいすばらしい一瞬なのですね。

【子どものノートから】
・「ミカヅキモはなかなかいませんでした。でも１匹いました。小さくてきれいでした。」（＊１個ではなく１匹というところが面白い）
・「ミカヅキモが２つ、はしっこでくっついていました。バナナみたいでした。」（＊分裂中の個体）
・「ミカヅキモらしきものが見えました。40 倍ではゴミみたいでしたが、100 倍ではシゴク（すごく）きれいでした。見れてよかった。」